

資 料

日本と韓国の大学生における国際交流会の実践と課題 —異文化交流プログラムとその評価を中心に—

村田 道彦^{※1} 菅野 淑江^{※1} 牧 千亜紀^{※1} 佐藤 弥生^{※2}

要旨：本稿では、異文化交流プログラムを企画し、日本と韓国の学生における国際交流会を開催した成果について報告する。その成果として、次のことがあげられる。①「日本食の試食」「伝統民謡の歌・踊り」等、催し物を通して両国の文化や習慣を体験できる機会を得ることができた。②「日本の社会福祉士の意義や役割」「福祉職の就職先」等、意見交換会にて福祉や看護の専門性および活動について情報交換をすることができた。③「コミュニケーション・カード」「スマートフォン」等を利活用して、相互理解に努めた。以上のことから、国際交流会では、学生同士互いの文化の違いを十分理解し合いながら、接するようすが見られた。また、さまざまな用具を活用し、コミュニケーションツールを多様化させ、学生同士の相互理解・自己省察の深化が見られた。今後の課題は、事前学習を含めた早い段階での準備に努め、学生の自主的な企画・運営を支援することである。

キーワード：異文化交流プログラム コミュニケーション・カード 情報活用能力

I. 近年、グローバル化にともない、国の支援のもと大学における国際化の推進が求められ、海外での活動を目指す学生のための研修や関係機関との連携を図るための交流事業が活発に行われている。

また、アジア全土における日本の国際競争力の向上を支える人材が求められているが、少子化に伴い18歳人口の減少、学生の質の保証等、大学を取り巻く環境は変わらざるを得ない。そのため、社会的な要請と産業構造の変化に対応できる人材の養成が求められている。

大学においても、留学生を取り込むシステム作りや国際観豊かな魅力あふれる学科・カリキュラムの編成が進められている途中であ

る。^{注1)}

そのような中で、本学におけるグローバル化・国際化を推進するためには、基本方針や国際交流が核となる拠点作りを発展的に改組していくための情報や資料を提供することが必要になる。また、海外を目指す学生が文化的な違いを理解すること、さらに留学生に対して日本文化に関する教育や生活上の相談・指導、就学を体系的かつ総合的に実施することが重要になってくる。^{注2)}

そこで、本学では教育交流の一環として、平成25年10月14日～16日の日程で、保健福祉学科教員2名が仁川才能大学を訪問し、学科長および福祉学科教員と国際交流に関する意見交換を

^{※1}東北文化学園大学医療福祉学部

^{※2}特別養護老人ホーム創生園泉大沢

行った。さらに、平成25年12月19日、韓国の国際交流団のうち大学教員2名が本学に来訪していただき、親睦を深めることができた。このような交流を通して、本学の学生とグローバル社会における国際理解力の育成を進めたいという意向で、異文化交流会を開催することになった。

その後、仁川才能大学社会福祉学科の教員1名と本学保健福祉学科教員2名で検討を進め、国際教育交流を目的とした異文化交流プログラムを企画した。

活動目的は、主に、本学学生と仁川才能大学の学生同士が異文化交流を通じて親睦を深めることである。さらに、異文化の違いを認め合いながら、情報活用能力を高め対応できるようにする。プログラムの構成は、「顔合わせ」「余興・催し」「意見交換会」「施設見学・体験」等の要素を盛り込んだ。さらに、学生が学ぶ視点として、①両国の文化や習慣を体験できる機会作り。②現在学んでいる医療や福祉の専門性の理解。③自発性、積極的行動を養う。④コミュニケーション技術・手段、プレゼンテーションを学ぶ。以上のようなことがあげられる。

これらを踏まえて、学生が異文化交流の協働学習を進めていくための要素を抽出し、より効果的な異文化交流教育を実現するための方法を模索していきたい。

評価について、本学学生と韓国の学生の国際交流会を通じて、本学学生の異文化に関する関心事・満足度を調べ、教員からプログラムの実施状況を省察してもらった。さらに、その意見をまとめ、成果と今後の課題を報告する。

II. 方法と計画

- 滞在期間：平成26年12月10日～14日
交流会：平成26年12月12日
場所：本学3号館3階被服実習室
1号館介護実習室
- 参加者：33名
(内訳は以下のとおりである)

<日本>	男性	女性
保健福祉学科	5	7
看護学科	2	1
教員	1(1)	3(1)
<韓国>		
社会福祉学科	8	2
引率教員		2

* () は途中から参加した者

3.日 程

時 間	行 程
10:00	宮城県啓友園見学
12:00	見学終了一本学へ移動
12:20	被服実習室にて学生交流会 ・挨拶・自己紹介
15:00	・芋煮で昼食 ・看護学生制作のプレゼント交換
17:00	・学生による演奏会 ・コミュニケーション・カード等を使った意見交換 ・介護技術講義・実技体験 ・学園内見学

III. 活動状況

1. 顔合わせ・自己紹介、余興、食事

はじめに、日本と韓国の教員から交流会開催に至った経緯、将来的な構想、異文化交流の意義や学習の視点等の説明をした。その後、日本と韓国の学生の自己紹介を行ったあと、事前に考えてきた余興等を披露し合った。日本の学生は、日本のポップソングの歌、韓国の学生は、伝統民謡の歌と踊り、さらに教員側からもフラダンスの踊りが披露された。途中で、おにぎり、仙台の郷土料理「芋煮」が、学生達に振舞われ、食事を交えながら、和やかなムードのもと進められた。



(写真1) アイスブレイク

なるべく日本と韓国の学生の席が偏らないよう注意して、4グループに分けた。その後、一同前に出てきてもらい、「関心のある科目」「将来の夢」「韓国や日本の思い」等を発表してもらった。それを引率した韓国の教員に通訳してもらい、学生に伝えた。



(写真2) 演奏・合唱

日本の学生からは歌謡曲（学生によるギター演奏・歌等）、韓国の学生からは伝統民謡の歌・踊りをそれぞれ披露した。写真は、韓国の学生が歌っているようすである。学生は何度か耳にしたことがある曲だったようで、とても「なじみやすかった」という意見が聞かれた。

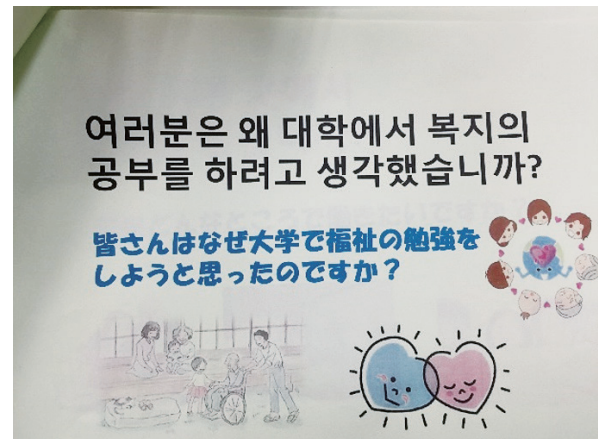


(写真3) クリスマス（プレゼント交換）

両国の学生がプレゼントを持ち寄って、プレゼント交換を行った。それぞれの国のクリスマス事情について通訳を交えて説明し合った。

2. 異文化に関する意見交換会

日本と韓国の学生がそれぞれグループごと対面になってもらい、事前に学生側に作成してもらった「コミュニケーション・カード」を使ってフリートークを行った。教員は、学生の姿勢・態度・発言等に注視して、その状況を記録した。



(写真4) コミュニケーション・カード

「天候」「資格」「医療福祉を学ぶ動機」「大学の専攻」「将来の就職先」「日本のアニメ・キャラクター」「日本の芸能・文化」等の分野に分け、それぞれの質問文が日本語と韓国語で書かれている。また、写真や図を用いてわかり易いようになっている。カードを互いに見せ合いながら会話を進める。



(写真5) コミュニケーション・カードを使った説明。

各自カードを見せながら、自分の話しやすいジャンルを選び出し説明している。写真は日本の学生に説明をしている韓国の学生。



(写真6) スマートフォンの活用

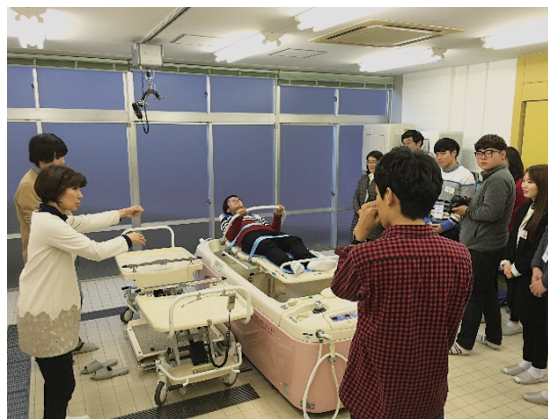
日本に滞在中の思い出の写真、動画を日本の学生に見せている韓国の学生。その他、会話で知りたい言葉など、電子辞書アプリを使って検索し、その文字を日本の学生に見せていた。

3. 介護技術体験

後半から、介護福祉士養成課程の教員による介護実技指導および介護体験を行った。日本の学生のほとんどは学習済みであり、介護教員の補助をすると共にサポート役として、一人ひとり韓国の学生に実技のやり方を説明した。

以下のようなテーマで介護講座を実施した。

- ①食器・スプーン等の福祉用具の説明
- ②介護のトランスおよびボディメカニクスについて
- ③機械浴の説明及び体験
- ④吊天井型リフトの説明及び体験



(写真7) 介護技術体験（その1）

本学の教員が韓国の学生に寝たまま入浴できる機械浴の説明をしている。



(写真8) 介護技術体験（その2）

教員が吊天井型リフトの説明をしている。昇降・走行とも電動式になっており、「介護をする人の負担を増やすことなく、家の中を移動できますよ」「介助の人の負担は大幅に軽くなります」等の説明をしている。実際に韓国の学生に試乗体験してもらおうと、周りから「うわ～」と声があがり、興味深く聞いていた。

4. 学校見学



(写真9) 両国の学生の集合写真。

この後、体育館や図書館、各部活動室等の建物及び入り口等を見学した。

V. 学生アンケート結果について

終了後に、本学学生15名に9項目からなる「国際交流会参加者アンケート」を配布し、回答してもらった。(対象学生には目的を説明すると共に回答の記入は無記名とし、個人が特定されないことを文章で説明し、回答をもって承諾が得られたこととした。)

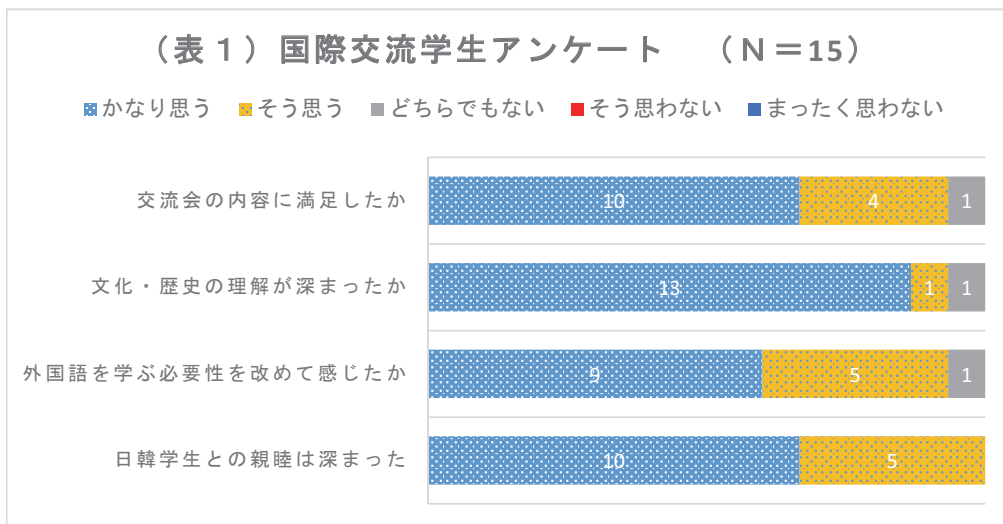
その結果(表1)の通り、「交流会の内容に満足したか」という質問には、「かなりそう思う」10名(67%)、「そう思う」4名(27%)と合わせて94%の学生が満足したと答えている。また、「文化・歴史の理解が深まったか」

という質問には、「かなりそう思う」13名(87%)、「そう思う」2名(14%)と答えている。また、「日韓学生との親睦が深まった」という質問には、「かなりそう思う」10名(67%)、「そう思う」5名(33%)であった。どの項目でも、肯定的な意見が9割以上を占めている。

さらに、項目別複数回答可の質問では、「国際人として必要なものは何だと感じましたか」という質問に対して、「非言語コミュニケーション」8件、「自分からの積極性」6件、「多文化の理解」および「周りの空気を読むこと」5件であった。次に、「うまくコミュニケーションをとるためには何が必要ですか」という質問では、「たくさんしゃべること」8件、「外国語の映画・ビデオを見る」6件、「韓国語をしっかりと勉強する」5件等の意見があげられた。

学生の自由記述からは、「芋煮を食べながら、お互いの食文化について知ることができた」「疑問に思ったことはすぐ質問することが大切だと感じた」「プレゼント交換、ハイタッチ、握手、一緒に写真を撮ったり、できてよかった」等、肯定的な意見が多数寄せられた。その一方で、「韓国語がわからなく、質問するのが大変だった」「質問を韓国語で事前に考えておくべきだった」等の意見もあり、今後の課題でもある。

(表1) 国際交流学生アンケート (N=15)



VI. 参加した教員・関係者からの省察

国際交流会に携わった教員6名の報告として、参加学生の状況、そのサポートに関しての意見を得たのでその一部を紹介する。

1) 半日の時間でしたが、交流会や出し物などを通して、学生同士が主体的かつ積極的にコミュニケーションをとっていたのがとても印象的でした。対象者の韓国と日本は国同士の政治的な問題もありますが、このような若い世代が、福祉や看護という共通の学びを通して、お互いに交流を深めていくいい機会になったのではないか。

2) 本学学生たちもとても前向きに準備に取りかかってくれました。普段みられない姿や潜んでいた能力を再発見することができました。学生の自己表現の重要な機会になったと思います。

3) 学外研修は経済的に困難な学生は体験できないが、こちらに来てもらう研修にすると参加しやすく、日本の学生たちが異文化にふれることができる機会として重要であった。また、福祉用具、器機の体験によって日本の技術と介護の様子が理解できたのではないかと思います。

4) マスメディアから韓国と日本の様々な社会情勢を目の当たりにしておりますが、お互いの距離を短縮し、同じ若者同士として交流する姿をみさせてもらうとほほえましい感じですし、これが相互理解の基本的かつ一番重要なかたちになるかもしれません。「同じテーブルで同じ目線で活動する姿勢が大切ですね」。

5) 韓国の教員から、「日本の学生はとても礼儀が正しく、勉強熱心ですね」というお褒めの言葉を頂いた。両国の「社会福祉士の専門性および役割について」意見交換をしていたのが印象的でした。

6) どうしても言葉に依存しやすい傾向があり、自らも言葉が理解できないもどかしさを感じ

じましたが「相手とつながりたい、だから言葉も理解したい」という自然な発想が生まれるものですね。このような貴重な交流の機会がもっと学生教育の中で発展できると良いと思いました。

VII. まとめ

日本と韓国の学生における異文化交流プログラムを考案し、本大学で交流会を開催した。その特徴については、次のことがあげられる。

一つめは、両国の文化や習慣を体験することができたことである。韓国の学生は、日本食体験や日本の学生の歌・演奏に熱心に耳を傾けていた。日本の学生は、頂いたお土産（韓国海苔）をその場で試食したり、韓国の学生による伝統民謡の歌や踊り等体験することにより、他国の文化に触れ、視野を広げることができたのではないと思う。学生のアンケートでも、多くの学生がプログラムに対する内容に「満足する」「文化や歴史の理解」が深まったと回答している。

二つめは、意見交換会の際に、双方の大学で学習している医療、福祉の専門性について、情報交換をした。冒頭の自己紹介をする際にも、興味のある専門科目や将来の就職先等、話している学生もいた。同年代であり、同じ領域を学習している学生たちにとっては、「日本の社会福祉士の意義や役割」「福祉職の就職先」等、相手の国ではどのようなになっているのか、どのような体系になっているのか、興味深かったようである。

三つめは、学生自身の自発性や積極的な行動を伺えることができた。介護講座では、日本の学生が大学で学んだ介護実技について、韓国の学生に熱心に教えていた。また、意見交換会の際に、「普段積極的でない学生も何か興味や関心のあることを伝えようと一生懸命話していた」「普段見られない姿や潜んでいた能力を再発見することができた」という意見が教員からも寄せられており、普段とは違う以外の面に注目している。

最後は、コミュニケーション技術、手段、プレゼンテーションに関することである。意見交

換会の際に、日本と韓国の学生は、自分が意図する話をしようとしてもなかなか伝わらないことがあった。その際に、簡単な英単語を発して伝えようとしたり、それと平行して、「スマートフォン」「電子辞書」「コミュニケーション・カード」「旅行ガイドブック」「翻訳本」等を活用し、映像や音を流しながら、自分の言いたいことを伝えていた。「伝えたい」「理解したい」という思いが自然に行動へと繋がる。学生のアンケートからも、半数以上の学生が「文化や歴史が深まった」と答えている。

以上のことを踏まえて、学生達は、さまざまな用具を利活用し、現況の中でコミュニケーションツールを巧みに使いこなし、コミュニケーション能力の素地を養おうとしていた。ほとんどの学生が今回の交流会を通し、相互理解・自己省察の深化を確認することができたと言えよう。

VII. 今後の課題について

一つは今回の国際交流会は、日本と韓国の医療・福祉を学んでいる学生および教員が対象で企画や運営、進行が進められてきた経緯がある。同年代であり、同専門分野を専攻している学生たちにとっては、共通するものが多く、共感することも多かったのではないだろうか。今回の交流会を通して、異文化の歴史やその背景にあることをさらに学んでいく、きっかけとなったのではないだろうか。今後は大学規模で、他学部を跨いでより多くの学生が参加する機会を得て、体験できたらと思う。とかく、海外へ研修に行きたくとも、経済的に厳しい学生にとっては、学内での国際交流会は馴染みやすい、参加しやすい等のメリットを持ち合わせ、より身近な学習方法になってくるであろう。しかし、大学内に独自の国際分野を取り扱う部署が無い場合、他国に本大学の施設を紹介したり、周知することに限界も感じる。

もう一つは、今回、国際交流を開始するにあたって、もっと学生同士の企画・運営を積極的に進めるべきではないかという意見もあった。準備に関しては、学生が積極的に活動してくれた。学生アンケートでは必要だったこととし

て、「たくさん話すこと」「韓国語をしっかり学ぶ」等の意見が寄せられている。また、自由記述からは、「韓国語がわからなく、質問するのが大変だった」「質問を韓国語で事前に考えておくべきだった」等の意見が寄せられており、さらに早い段階での学習と準備、教育が必要であったと思われる。今後の教育の質を高め効果を図るためには、日本の学生からだけではなく、韓国の学生からもデータを集め、比較検討をし、さらなるプログラムの質および教育的向上を図っていきたい。

【謝辞】

今回の来訪に際して、仁川才能大学のご支援とご協力によって、円滑で友好的な交流会を実施することができました。特に、趙美敬先生、尹貞恵先生、権現珍先生には、交流会のプログラム作成の際にご助言やご指導を頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。

*本大学における助成事業である平成26年度研究支援費(B)「日本と韓国の福祉・介護・看護学生による異文化理解のための国際交流プログラム実践研究 村田道彦・佐藤弥生・菅野淑江・牧千亜紀」で行った成果である。

注1) 文部科学省が中心となり、関係各省等がそれぞれ実施している国際教育協力や産業人材育成に係る施策等について情報共有をした上で、効果的な国際教育協力を進めるための連携方策等を検討している。大学間交流協定などに基づき、多くの支援制度が実施され、大学交流の活性化と大学の国際化や国際化する社会に対応できる人材育成、国際理解・知識の拡大が行われている。

注2) 国際化・グローバル化を推進するため国際交流教育に関する基本方針や実践、分析、検証等の研究報告がなされている。特に、国内・外の学生が、異文化交流を進め、「多分化共生能力としてのコミュニケーション育成」「主体的学習の重要性への気づきや異文化コミュニケーションに関わる意識の変容」等、さまざまな成果が明らかになっていることから、

学生の特性を踏まえた、文化に関する教育、生活上での交流を含めた新しいアプローチが重要になってくると言えよう。

【参考文献】

- 1) 文部科学白書 「国際交流・協力の充実」
第10章 2014； p 340－359.
- 2) 文部科学省高等教育局中央教育審議会 大学
分科会 「大学のグローバル化に関するワーキ
ング・グループ」 大学のグローバル化に関する
ワーキング・グループ（第6回）4・5 資
料 2014.
- 3) 黄梅英、孟慶栄、森田明彦（他）グローバ
ル社会における国際理解力の育成に関する研
究.尚絅学院大学紀要第 69 号 2015；113－128.
- 4) 西原明希 学生主体型海外事情プログラ
ム：企業人交流会企画等を通じた異文化コミュ
ニケーション能力育成の試み 北星論集（経）
2015；54（2）：103－111.
- 5) 坂本利子 異文化交流授業から国内学生は
何を学んでいるか－多文化共生力育成をめざし
て－立命館言語文化研究 2013；24(3)：143－
157.

Practice of an international exchange of Japanese – Korean students and its issue hereafter

-From the viewpoint of cross-cultural exchange program and its evaluation

Michihiko Murata, Yoshie Kanno, Chiaki Maki, Yayoi Sato

We set up the cross-cultural exchange program and held in our college an international exchange seminar between Japanese and Korean students. The outcome and issue arose from the program are as follows. We could have a chance to experience each countries' culture and custom through such event like “tasting of the Japanese food” and “traditional folklore and dancing.”) Information exchange was made about the specialty and activities of the social welfare and nursing through opinion exchange party discussing on “the significance and role of the certified social worker in Japan”, “place of employment for a person seeking welfare job”. Students explained their own opinions clearly to the others using “smartphone” or “communication cards” From the above studies the participated students seemed to communicate each other by deeply understanding the cultural difference of them. Furthermore it was found that each student deepened their level of mutual understanding and self-examination by using the various kind of communication tools. Therefore, the future issue is found that we need to support their voluntary planning and management work of the international exchange activities and besides the participating students need to make effort to prepare themselves in advance to the activities including prior learning.

Key words : cross-cultural exchange program communication cards information literacy